

【p 84～ p 87】 つながるいのち 一朝来市 糸井の大カツラ

1 資料活用にあたって

- 本資料のP 8 5、P 8 7の写真をプロジェクターで拡大して映すなど、資料提示の工夫をすると、子どもたちは共感的に疑似体験しやすいので、なお一層効果的である。
- 低学年の学年段階を考慮すると、生命のつながりなど生命について知的に理解する資料として扱うことはふさわしくない。大カツラの不思議さ、生命の力、そして、共に生きていることの愛おしさなどを感じることによって、自然や植物を大事に守り育てようとする心情を育てる資料として扱う。

2 資料の読み方のポイント

- 変化するのは：わたし（子どもが「わたし」になって考えられるように発問を工夫する。）
- 変化するきっかけ（助言）は：糸井の大カツラ
- 変化するところは：「お日さまにてらされてきらきら光るはっぱがわたしたちに話しかけているようでした。」

3 読み物資料の素材について

【参考文献等】

- ・ 「但馬の巨木 100選」社団法人 兵庫県林業会議
- ・ 「但馬風土記」 但馬文化協会（発行） 小谷茂夫編集代表
- ・ 「ひょうごの自然歩道ガイド」神戸新聞総合出版センター、兵庫県自然環境保全課（編集）

○ 糸井の大カツラについて

- ・ カツラ（カツラ科・カツラ属）
- ・ 国指定天然記念物（1951年6月9日指定）
- ・ 場所 兵庫県朝来市和田山町竹ノ内
- ・ 幹周 19.2m
- ・ 樹高 35.0m

- ・ カツラの雄株で、主幹は朽ち、大小84のひこばえ（※）が主幹の周囲を取り囲むように林立していて、一見カツラの森のように見える。朽ちた主幹の広さは約10平方メートルあり、主幹の推定樹齢は2000年ともいわれる巨木である。土地の人はこのカツラを衣木（ころもぎ）とも呼び、昔、大ひでりが続いたとき、名僧を招き雨乞いをしたところ、霊験があらたかであったという。その際、この樹に衣をかけたことから衣木と呼んでいる。

※ひこばえ

蘗（ひこばえ）とは、樹木の切り株や根元から生えてくる若芽のこと。太い幹に対して、孫（ひこ）に見立てて「ひこばえ（孫生え）」という。

4 展開の具体例

つながるいのち ―朝来市 糸井の大カツラ―

- ・主 題 名 ・自然を大切に D (18)
- ・資料の概要 ・遠足で大カツラの木を見たわたしたちは、その大きさと美しさに歓声をあげる。最初の木の栄養をもらって大きくなった80本ほどの「ひこばえ」が最初の木を守り、二千年も生き続けていることを知ったわたしは、木の中に入って自分を囲むひこばえを仰ぎ見ながら、生命のつながりや自然のすばらしさを実感する。
- ・ね ら い ・糸井の大カツラの中に入って自然の不思議さを体験したわたしを通して、自然に親しみ、動植物に優しい心で接しようとする道徳的心情を育てる。
- ・展開の具体例

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応	
導 入	・今日の資料に興味を持つ。	副読本P85の写真（糸井の大カツラ）を見ましょう。	木の大きさを実感させながら、大カツラの様子を理解させる。
展 開	・資料の範読を聞きながら黙読をする。 ・近づいて木を見た時の主人公の気持ちを考える。 ・命のバトンタッチのことを先生から教えてもらった時の主人公の気持ちを考える。 ・木の中から空を見上げた時のわたしの気持ちを考える。	木に近づいたわたしは、どんなことを思ったのでしょうか。 ・遠くからは一本の大きな木に見えていたよ。 ・たくさんの木が集まっているよ。何本くらいあるのかな。 ・たくさんの木は兄弟の木なのかな。 「二千年も。すごいなあ。」と言いながら、わたしはどんなことを思っているのでしょうか。 ・二千年もすごいなあ。 ・バトンタッチしながら大切に命を守ってきたんだね。 ・なんだか不思議だなあ。 木の中から空を見上げたわたしは、どんなことを考えているのでしょうか。 ・ずっとバトンタッチを続けて、長生きしてね。 ・自然の力ってすごいな。 ・バトンタッチができるように、みんなでこの木を大切にすることだね。	何本もの木が集まっている様子を見た時の主人公の驚きや不思議に思う心に共感させる。 植物の不思議さや生命の力を感じ、自然愛護の意識が主人公に起こっていることをおさえる。 大カツラの中に入って体中で自然の不思議さを感じ、自然に優しく接しようという気持ちになっている主人公の心情の高まりに気付かせる。
終 末	・感じたことを発表する。	感じたことを発表しましょう。	